雑詠日記

徐山猿声　巻の八

一九九五年

市井一人

パレスティナに生まれ、ベルギーに移住して学んだミシェル・クレイフィという映画監督が、対談で次のように語っている。

「現実の、過去の情報を、夢の諸要素を、論争を、私たちはどんどん蓄積しなければなりません。詩の仕事とは、私にとって、それらを統合し、表現へと到達させること、詩に到達させることなのです。」

人生を生きるという「言語ゲーム」は、「詩の仕事」というふうに読み換えることができることになる。それは、なかなかわたしの手に負えそうにない。それでも、あこがれとしてのわたしの雑詠記録は、まだ続いている。蟷螂の斧で、石に彫琢しようとしているわけだ。レリーフを刻みつけることも困難だろう。しかし、たゆまなければ、磨くことはできるかもしれない。一片の磨かれた玉を残すことができたら…。

一月二日

腹痛が初夢破る夜明け前

初夢に代えてしじまに横たわるこのわたくしに思念は動く

一月六日

雪消えて水仙朝の陽に白く

亡き人の閉ず門たたく年初め

一月八日

蜜柑生る小山の下の瑠璃の海　（娘の友人を連れて遠出）

松明けて旗差しものが招く城　（唐津城）

初凪に名護屋の陣は旗立たず

夕陽にへの字を二つ雁の列

冬暖か群に遅れて行く鳥

一月十三日

出で立てよ木の葉ころがる寒い朝

凍てつくよひとまず棲家へ帰ろうか

一月十六日

冬の夜を疾駆する音遠ざかる

屈託を歌う声する冬の闇

冷え冷えと闇につぶやき寝付かれず

淡路島、神戸を結ぶ断層でマグニチュード7．2の地震。

一月十七日

信号のそばににょっきり冬の月

「唯物論というのは、何も終わっていないという認識、あるいは常に中間にいるという認識を指すのであって、終わりをめぐる物語は全て観念論です」・・・浅田彰。

一月二十日

新聞の見開きすべて死者の名、名・・・

大寒に迷い蝿来て日向ぼこ

一月二十一日

灰色の空で家売るアドバルン

夕闇に闇のかたまり眠る山

一月二十三日

眠る山おのれの闇に沈みこむ

永井均という人の文に、「ある意味ではすべての物種であるが、決して言葉で指したり語ったりすることができない根源的な奇跡、もはや決して概念ではない究極の現存在。それがどこまでも概念化され、語られていく言語ゲーム。だからぼくにとって、言語ゲームとは、つまりぼくがみんなと生きている世界とは、この読み換えの場なのだ。そして、ぼくの人生とは、結局この読み換えを生きるということだったのだ。」

一月二十五日　星々の座禅道場冬の空

「初めなき夢を夢とも知らずしてこの終りにや覚め果てぬべき」…式子内親王。人が停滞に陥るあらゆる条件が日常的に存在する。

一月二十七日　わが山は雪に覆われおごそかに霧立ちこめる居住まい正せ

粉雪がさらさら目白はみずみずし

したたかに友は酔いしれ世に暮らす苦楽を語るなお詠ずべし

一月二十九日　牡丹雪髪に受けつつ行く少女

二月一日　鶏の鳴く声を消す雪の空

見上げれば音無き声があふれ満つ無量の雪の幽玄の空

二月三日　きさはしの氷踏みしめ歩み出せ

二月八日　寒ゆるみ犬と十日の月仰ぐ

二月十二日　春待つ雨避けて家無き人座る

二月十六日　梅の香に天の入り江を進む月

犬の影低く梅の香たどる夜半

満腔に梅の香充たせ有漏の身に

二月十九日　家ごとの梅の花咲く山の里

梅の香をのせる春風吹き寄せて鎮守の杜にざわめき起こる

竹の幹こすれて春を探る音

森影の杉の落ち葉を踏み行けばしのびやかなる春の水音

日を計り風待つ杉の花たわわ

ドゥルーズとガタリの『千のプラトー』を読み始める。フランスの現代思想家は、詩によって哲学を語ろうとする。しかもその哲学的な詩は散文で書かれている。日本の知を誇る人々もそれを魅力としているようだ。フランスの哲学を開始した先輩はあれほど明晰な文章を書こうとしたのに。別の先輩の言った「読み解くことの難しい詩」が考えることに適しているというのだろうか。

二月二十一日

ささくれた私と世界かすかなる変調感じ昨日また今日

「個人的な言表などというものはなく、言表を生産するもろもろの機械状アレンジメントがあるのだ。…アレンジメントは根本的にリビドー的なものであり、無意識的なものである。」

二月二十二日　一瞥をくれて猫去る路地の春　（朝）
白猫と見合う　早春暮れかかる

二月二十五日　春の陽に華やぎを生む力あり赤肉の皮膚静かに歌う

二月二十六日　時を撞く犬と目覚める春一番

「一つの情念の中には多くの情念が含まれており、一つの声の中にはあらゆる種類の声、あらゆるざわめきや異言異語が含まれている。そのためどんな言説も間接的であり、言語に固有な変換とは、間接話法の変換なのだ。」

三月二日　野も山も物見遊山に行きたげな
航跡が春陽にかすむ壇ノ浦
安徳の墓にも春陽山の中

三月三日　春雨に六羽の鴨の旅姿

春雨を避ける白猫門の軒

石上の水に広がる一打ちの微動は春の糠雨の裔

三月四日　淡雪に天保の墓補修する

三月五日　春光とゆるやかに時刻む犬

のびやかに影を遊ばす春の風

三月六日　天地動く雪のしずくに映る春

三月七日　雪達磨手足も顔も融け失せる

「もろもろの表現、または被表現は、もろもろの内容を表象するのではな

く、それらを予感し、それらに逆行し、それらを緩慢にしたり、または加速したり、分離したり、または結合したり、あるいは切断したりするために、内容の中に挿入され、介入する。…一つの言表行為のアレンジメントは、物について話すのではなく、物の状態または、内容の状態にじかに話すのだ。」

三月十二日

旅立ちの娘を黄砂が運び去る

黄砂降るかすむ玄海底深く月無き砂漠旅する海馬

この旅は海馬を恃む春の夢

三月十四日

虚空から枝に生まれる欅の芽

三月十六日

梅の花散るよ物皆揺れる朝

愚者たちを枝で見つめるキジバトよ地を這う者の定め悲しめ

三月十七日　狼が翔る天空おぼろ月　（月齢十五）

三月十九日　器官なき身体になれという本を働き悪い器官で読むよ

三月二十一日　蓮池は埋められ春の土ぼこり

春塵に鳴る風を見る鳥になれ

三月二十三日　木蓮の白さに空が染まる朝

あの丘の村にも春の物語

三月二十四日　「森の中の淑女たち」という映画見て天命を知る歳を迎える

人は生をストレンジャーとして歩む

三月二十五日　花冷えの雲低い日にハイドンの「ひばり」をかけて天命を聴く

三月二十六日

「少年ゴータマよ」

戦火を逃れて千里の道を歩いてきた少年よ
ほこりにまみれた体を、疥癬の身体を洗う少年よ
骨と筋とそれを包む皮膚だけの長い脚は
　悲しみでいっぱいの脳を運ぶことができた
その細い細い腕はそれでも
　祈るために手を合わせることはできる

君がそのようにやせているとしたら
肉の一部を食ったのはこのわたしにちがいない
消費を極限にまで切りつめたその身体は
　未来の人間のあり方を企てている

いや　既に遠い昔ガンダーラで
　ゴータマよあなたの身体をそのように刻んだ者が居た
あなたは今　イスラム教徒とキリスト教徒が争う地で
　このように無力な存在によってわたしを撃つ
たった一枚の写真に出現して
　万里の距離にいるわたしを撃つ

もしあなたが生きることができないとしたら
どうしてわたしが救われることがあり得るだろう
あの誓願が既に成就しているのだから

三月三十日
警察庁長官撃たれポリス立つ時代が影を落とす駅頭

三月三十一日
林立する卒塔婆の上桜咲く

四月四日

菜の花の上でコウモリ世界視る

四月七日

十字路をちょうちょがよぎる花の頃

学舎の花見る今は愚禿の身　（母校の）

四月八日

春霞にぎわう森に生まれ出る

ゴータマ・シッダルタは、「アートマンは死後にも存在するか」という問いに沈黙をもって答えた。

四月九日

千年を経て新たなる閉塞の中世にある大世紀末　（雨の選挙日）

四月十三日

置き去りにされてワラビを採りつ行く

茨道少年の頃探し行く

四月十四日　雨やさしく桜の上の山の鯉

そもさん、せっぱ、問いは残る春の山

四月十五日　一陣の風に万花の満ちる場所

四月十八日　得たきもの大きな楠の木を見上げ若葉数えるゆとりある生

四月二十日　新緑と何を語らう老いる人

若草を刈る草刈機蝶を逐う

四月二十二日　藤の房揺れて眠りは醒めやらず

蜘蛛も出て「舞踏への勧誘」聴く朝

模索するわたし神経回路網「空即色」の世界に対す

四月二十五日

たとえ　これまで報われることがなかったとしても
わたしは、つとめ励むことを勧めた人を信じよう
今日　花を見つけ、花を育てようとするだろう
精神の自由を得て、わたしの存立を賭けるだろう

四月二十八日

鋤いた田を渡る蝶々の意志かたく
種蒔く人播くことせずに畠歩む

四月三十日

閑居して雨の黄金週間を鋼の艶に磨こうとする
春ただ中　母の消息つらく聞く

五月四日

若葉見る目の歓びや森と在る

五月九日

倦怠の五月甍は反りかえる

五月十一日　わが友は光の風に踊る麦

五月十二日　若者がカラオケビルの箱の中歌う姿に人間探求

五月十四日　天駆ける雷春を逐い払う
　　　　　　蛙鳴く雨や世界はかく巡る

五月十九日　夏柑の花老成の実を慕う

五月二十五日　わが山は霧の帳の中にある「時の踊り」に耳を澄ませば

五月二十六日　なでしこを一枝／　異国のグラスに挿し入れて／　励ましとする／
　　　　　　山より高いクレーンが／　あやうく何かをelevate

五月二十九日　去年蚊に刺された瘡と蛙聞く

五月三十一日　　夕陽に押され坂こぐ五月尽

六月四日　　卯の花を踏んで滝への径登る

　　　　　　滝音に散る卯の花に睦む蝶

六月六日　　川に沿う土手の小道の真ん中にピン一つ立つ狙い定めよ

六月七日　　紫陽花の広がる笑みをもらう朝

　意味作用とは、果てしない送り返しの無限の束。意味作用の語彙は、いたるところにひらかれている。人は、話法の中で、話法によって動き回り創造することができる。各個人はまた彼である独自の表象のあの流出である。

…C．カストリアディス

六月十四日　　百合落ちて深く息する曇る朝

六月十五日　　蛍を見よう　少し酔っての回り道

六月十六日　　あじさいを首まで水に浸け癒す

あじさいがガラスの球に抱かれて広がる華の染める色域

六月十七日　　小曲が映画の場面鮮やかに脳裏に生ず琴線ここに

「精神現象は、ほんの少しの表象にもとづいて、つまり無にもとづいて《最初の》表象を生じさせている、根源的な想念である。」

六月二十二日　　六月の深夜目覚めて夜行する事物の精の物語聴く

「あらゆる表現は基本的に言葉のあやである。」

「あらゆる言語が言語の濫用である。」

六月二十四日　　自転車のあじさいバスを抜いて行く

六月二十六日

山笠に備え心と身にはっぴ　　　　　（バスの中からの傍観）

「山笠があるけん（ここは）博多たい！」季節に意味を創る熱中

クチナシに聞けば余情はあふれけり　　　（胃透視）

六月二十九日

人間という条件を身体で学ぶわが胃にポリプ見つかる

七月二日

雷におびえる犬や猛き梅雨

「ゲーデルは、語りえぬものについて語るための方法と限界と理念を明らかにした」・・・吉永良正。

七月七日

短冊を撫でて夕陽が書く願い

無窮花落ち梅雨去る夕べ臓物にポリプを蔵しなお明日を期す

七月八日　夏空を急いで渡る蝶一つ

七月十日　虫一つ殺し夜風を求める身

七月十二日　世紀末「¥enshop」の広告が立つ夏田

賀茂川に鮎釣る人の都振り

七月十四日　ゆったりと夏の日落ちて堀端に蓮の台のほのかな明かり

七月十五日　白雲に白鷺のかげ溶ける夏

七月二十日　荷造りの中でダリアの美の堡塁

七月二十一日　木陰行く蝶を見つけて息をつく

七月二十二日　金粉を驟雨に散らす揚羽蝶

驟雨行き脚長グモの家普請

中心で果報待つ蜘蛛将の顔

七月二十五日

緑陰にトンボも姿消す真昼

八月三日

少年の蟷螂あたま撫で思案

八月四日

油蝉焦がれガラスを越えられず

八月七日

樹の影に腹大き人立つ真夏

盆に

蜂の巣を捕って海へと流しやる

八月十七日

昨日から北京に来ている。柴禁城で、

夏草や大和殿上移る時

八月十九日　後宮の連理の樹下に風を待つ

香山、頤和園へ。＊先生に、漢字を並べたメモ用紙をお礼のしるしに渡す。

「題紫禁城」
後宮屋上夏草青
連理樹下多民草
扶桑客子不可知
禁城見了幾星霜

八月二十日　ざくろ生る寺にラマ僧数珠を繰る　(雍和宮)

炎天下香焚き跪拝する少女

弥勒仏見上げて汗をぬぐう堂

八月二十三日　北の道鼓楼を遠くかすみまで

八月二十四日

胡風告秋来　　蝉声消林間　　遊子遠馳想　　長城連青山

長城で息つき立てば蝉の声

皇帝の玄宮石の冷ややかさ

八月二十七日

ラサへのエクスカージョンに加わり成都に来た。ところが軽い風邪に罹り、高地へ向かうことを断念。一人残された。『中国名詩選』を携え、杜甫草堂へ。赤壁に挟まれた小径と竹の梢、風土にあった落ち着きのある光景。

竹林清風　相思の人
白蝶独り舞う　緑池の上
草堂花径　笑声聞こゆ
まさに初秋歌うべし　錦官城

八月二十八日

濁る府河蝉声流し二千年

八月二十九日

門前に涼む店番仏の顔

香の中語らい歩く若き僧新中国の一隅に在り

漢照烈陵、大衆が諸葛孔明を親しんで呼ぶ武侯祠へ。『三国志』の英雄たちの像が並べてある。関羽、張飛の義兄弟が劉備の両脇にいる。

千秋を超えて出師の表残る　　　　　（石碑に刻んである）

武侯祠の雨に旅愁のつのる秋

細雨降る帝陵巡る石の径墳丘の木々仰ぎ見て立つ

西蔵飯店の明珠餐庁で今日は楽の演奏があった。昨日からわたしに親切にしてくれたウェイトレスに、

胡弓奏楽誘旅愁　　錦城佳人一笑好

と書いて示したら、またにっこりとよい笑顔が返ってきた。

八月三十日

李白の「峨眉山月半輪の秋」の詩句に誘われて、ふらふらと峨眉山に旅立つ。百五十㎞をタクシーで走る。時はまさに仲秋初旬。

朝霧にかすむ稲塚蜀の国
刈るそばで落ち穂拾いのアヒルたち
漁りの船や大河に朝の霧
にぎわって鴨も横切る交差点
秋浅く七佛の蛾眉香と汗
こおろぎも静寂愛す峨眉山下

八月三十一日

名詩ありただ霧仰げ峨眉の秋

蒋介石の別荘であったというホテルで目覚めた。

峨眉山下朝霧こめる窓の外夢幻に誘う草に露置く

帰途、路線バスがないことが分かって途方にくれていたら、男気のある観光バスの運転手が、よし乗れと言ってくれた。言葉の話せない者にとっては、ちょっとした冒険であった。

九月二日

旅の果て赤銅色に日が映える錦官城の秋浅い暮れ

北京。旅も今日が最後の夜。ホテルの料理店で、夕食は木琴と胡弓と月琴の演奏つきであった。夫婦とその娘であろうか。月琴を弾いた娘は、眉間に緊張をただよわせて愁いをふくんだように見える美人である。われわれを日本人と見てか、日本の曲も演奏してくれた。

緋衣楽人寄故曲
湛愁眉目悩帰心
人在逆旅赴何処
明晨遊子出北京

月琴で秋を奏でてかしぐ首

九月四日

日の本も横木に稲を干す季節

九月十二日

稲穂垂れふとわが暮らし省みる

健忘の人も己の想起する事を事実と主張し譲らず

その人が母であるとすれば悲しく、また人間の条件をいっそう痛烈に知ることにもなる。

人間は、不十分な材料でもそれを構成して言葉の系列とすることができる。

その能力は、脳の構造と結びついて、人間に基本的に備わっているものにちがいない。人間存在の意味や価値は、そこから出発しているのだ。それを少しは知ったとして、いかにすべきかという問いは依然として答えるのに困難な問いである。しかも、何かを為さなければならない。

九月十五日

虫の音に犬狂おしく叫ぶ夜半

子トカゲが長い尾を引く萩の下

九月十七日

安房を行く野分け筑紫の花野吹く

コスモスの畠に分け入り蝶となれ

九月十九日

藁の香にサンクス・ギヴィング祝う虫

さっくりと梨を味わいリフレッシュ

「およそ言説というものにはすべて穴があいており、それが事物について語るときには、欠如、しくじり、屈曲点などを伴って語るということ」、「ほんとうに革新的な作品は、伝統に培われつつ、伝統をずらすような作品だけだ。その意味ですべての思想的な作品は、不決定性から生まれてくる。作品はある記号を発するのだが、この記号こそがこれから生まれてくる読者、観衆、受容者を作り上げるのだから、いったい誰に対してこれが発せられるかは、まったくたしかではない。」…C．デカンの本の中、ラカンに関して。

九月二十一日

手紙持つ白髪の人前見つめ足底ほどの歩幅で進む

九月二十二日

覇王にも春秋があった。わたしの春秋に耐えるのに、堀田善衛氏にならって詩的精神をもってすべきであろう。秋気まことによろし。

この生をかけがえなしと思うなら美しきもの数多く見よ

「美は、人間にとってのみ価値を持つ」、「美は、悟性と構想力の一致を、自己が自己の内部で経験することに由来する」… カント。

九月二十六日　木犀のいのち花咲く前にとる　（慣れ親しんだ者を伐った）

十月二日　白萩に幼生託す蝶の夢

十月三日　夕闇の花野くさぐさ動き出す

十月五日　無花果に少し果報を見いだす日

「語りが生み出すものはつねにコードを逸脱する」…リクール。

十月八日　ホオジロの頬木犀の金のそば

十月九日　一筋の雲名月と構図とる

澄む夜空深くつるべを下ろし汲め

澄む秋に閏八月名月の光しみ入る身の内にまで

「詩人は実際に起きたことを報告するだけでなく、起こりうること、可能な出来事をも物語るのだから、詩は歴史よりも哲学的だ」…アリストテレス。

十月十三日

愚者を詠む愚を去り秋の風と在れ

ポリープを切って痛めた胃を持つ身現し世に耐え花野をめざす

夕靄に稲の香を吸い川は澄む

黄金の雲たなびかせ西崚に美を紡ぎ出す秋の夕暮れ

百歳を生きていのちを返す人　生とは何か語らずに逝く

十月十七日

天井で揺れる葉影と秋の水

十月十九日

コスモスが踊り黄蝶は風に酔う

十一月一日　コスモスを経巡る風に乗る砂塵

砂塵から生まれた星に花開け

十一月二日　街灯の光の中で黄葉が深まる秋と時熟しつあり

五斗米に腹のふくれる秋の暮れ

十一月六日　怒る目の向こうに桜紅葉散る

小栗康平監督の映画『伽耶子のために』を観る。人生は、完全に脈絡のついた出来事としてこのわたしに見えているわけではない。このブラウン管上の出来事とどれだけ違ったものに成しえるだろうか・・・。

夕刊が、ジル・ドゥルーズが自殺したと報じている。

十一月七日　木枯らしが禿頭叩き鼓吹する

白菊は秋寂ぶ夜の風に立つ

十一月九日
花終わるコスモスの畠分け入って真白い犬が無心に遊ぶ

大いなる月が見送る行く秋よ

わたくしは故障許され可塑的なからくりとして世界に生きる

十一月十四日
鐘撞いて時雨の朝の地の目覚め

十一月十六日
べらぼうな仕打ちを受けたその夕べテレビドラマに心が動く

十一月十七日
白露は取り残された柿の上

十一月十九日
ひつじ田に稲穂天運たゆみなし

十一月二十四日
見つめれば雪けむる山畏怖すべし

十一月二十五日　陽の中で鶏頭の血が燃え上がる

感傷も無縁に枯れ葉落ちる時

柿植えて仰ぐ小春の三日月

留守がちの家の留守居は大き蜘蛛

十一月二十六日　光となれ銀の川面とすすき原

十一月二十八日　人間の悲愴を歌うピアノ曲目を閉じて聴くなお歩みだせ

冬の世に身を軽やかにもらい風呂

十二月六日　腹立てて雪の山見て茶を含む

十二月七日　耳澄ませ天から霜が降り積もる

花くれた人見送れば冬の月　　　　（太陰暦十月十五日）

十二月十一日　冬の陽を乗せて潮行く天の時

十二月十九日　夜半に醒め脈絡もなく想起するこの表象が人生を成す

十二月二十二日　コスモスの枯れ野に霜が光る朝

わが犬と顔見合わせて冬至越す

十二月二十四日　山茶花の白さに重ね雪の花

十二月二十五日　木枯らしもささやく時のある世界

十二月二十八日　海峡の潮の目変わり暮れる年

十二月二十九日　夏柑の原樹で年を重ねる実

夜回りの鈴の音細る冷えこむ夜

一九九六年　正月
徐山亭　謹製

「春夜喜雨」
杜甫

好き雨は時節を知り
春に当たりて乃ち発生
風に随いて潜かに夜に入り
物を潤して細やかにして声無し
野径　雲は倶に黒く
江船　火は独り明らかなり
暁に紅の湿れる処を看れば
花は錦官城に重からん